

東京バッハ合唱団 月報

[第 645 号] 2016 年 3 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101

Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3-47604

Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No. 645

March 2016

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

第 113 回定期演奏会の 4 つのcantata

日常生活のバッハ——教会暦を辿って

大村 健二 (団員)

2011 年 3 月の東日本大震災から 5 年が経ちました。東京の私たちには想像もおよばない被災当事者のこの間の体験や心境を、それでもわれわれはいろいろと思いをめぐらしてみます。読み物や報道で知らされた数々のカタルシスの記憶や、一人ひとりのご苦労についての断片的な伝聞にすぎませんが、その一コマ一コマを素材に、この国に住む仲間として、これからもずっと、かれらの現在と未来に関心をもちつづけていくことになるでしょう。

*

次回公演が近づき、上演曲目のご案内をする時期となりました。「南相馬公演での選曲は、それこそ今までになく、生死の淵にのめりこむような深刻な内容を揃え、そんな極限の人生にあっても、希望を抱いて生き抜くという私たちの覚悟を分け合うものになりました。それでは、つづく来年の公演では、バッハ音楽でいったい何を表現したらよいのでしょうか。私は、安定した日常生活への祈りを渴望したいと思ったのです」(月報 2015 年 2 月号) という主宰者のコメントとともに、第 113 回定期の主題“日常生活のバッハ — 教会暦を辿って”が掲げられ、4 曲のcantata 作品が選曲されました。世界中を蔽う難民の漂流なども含め、「こんなことになってしまった地球で、私たちは、日常の安らぎを探し求めます。18 世紀のバッハにとっては、それが教会暦に秩序立てられた音楽でした。若くして家族の半数を亡くしてしまったバッハにとっては、やはりそれも必死な戦いだったことを思います。」(同月報)

(1) cantata 第 148 番 《み名の栄光を讃えよ》

この曲は、当合唱団にとっては初めて取り上げる作品であり、出版譜としても一昨年 11 月発行の最新刊です。曲の成立は 1723 年または 1725 年ごろで、三位一体節後第 17 日曜日のために書かれたもの。

バッハ時代の教会暦では、一年の円環が、①降誕節の圏(冬)、②復活節の圏(春)、③三位一体節の期間(夏・秋)と、大きく 3 つの圏域に分かれて把握されています。①は待降節からクリスマス(12/25)をへて顕現節(1/6)後の最終日曜日まで、②は受難節前日曜日から受難週とイースター(復活祭)、聖霊降臨節まで、

③は三位一体節(5/末~6/初ころ)から同節後の最終日曜日までにあたる季節。ですから、このcantata の教会暦「三位一体節後第 17 日曜日」は、秋もたけなわのころに巡ってきます。

この日に読まれる福音書(ルカ 14:1-11)は、「安息日に病気を治すことは律法で許されているか否か」というイエスの問い。<律法>と<福音>との対比を鮮やかに示した箇所です。一年でもっとも思索に適した季節に、安息日の意味について考えてみようとするものです。

トランペットが先導する合唱フーガ(み名の栄光を

— 第 113 回定期演奏会 ご案内 —

2016 年 5 月 28 日(土)、午後 2 時開演

府中の森芸術劇場ウィーンホール

cantata 第 148 番 《み名の栄光を讃えよ》
cantata 第 40 番 《地に來ませり 神のみ子》
cantata 第 16 番 《主 ほめ歌わん》
cantata 第 192 番 《ああ感謝せん 神に》

[アルト] 佐々木まり子

[テノール] 鏡 貴之

[バス] 山本悠尋

[オーケストラ] 東京cantata 室内管弦楽団

[オルガン] 草間美也子

[指揮/オーボエ] 辻 功 (BWV16)

[指揮・訳詞] 大村恵美子 (BWV148、40、192)

・チケット: 前売り 3500 円 (全席自由 500 席)
・お申込み/お問合せ: 東京バッハ合唱団事務局
(下記のいずれかでお申し込みください。振替用紙同封にて、チケットを郵送いたします。後日、お近くの郵便局よりお振込みください)

●電話: 03-3290-5731 ●FAX: 03-3290-5732

●メール: office@bachchor-tokyo.jp

●HP お問合せ窓口: http://bachchor-tokyo.jp/

後援会員・団員の皆さま

上記公演のご招待状を、当 3 月号月報に同封してお送りします。お仲間等お誘い合わせのうえ、ご来場いただけますよう、ご案内いたします。

讃えよ 晴れ着にて主を崇めよ)の鮮烈と明快に始まり、アルト・レチタティーヴォ(ああ 鹿の清き水をあえぎ求むるごと)とアリア(口と心 開かん)の、ほとんど官能的な安らぎへと至る“安息日カンタータ”。

(2) カンタータ第 40 番《地に來ませり 神のみ子》
(3) カンタータ第 16 番《主 ほめ歌わん》

つづく 2 曲は、ルカ伝(ルカによる福音書)第 2 章のカンタータ群に属します。キリスト教世界の人びとのカレンダーでは一年の初めにあたる時期(教会暦円環の①)です。主の降誕を待ち、生誕を祝い、地上世界への顕現を迎えます。悪との闘いに、いま! 神のみ子が現れた。その驚きと喜びの大合唱に天の軍勢のホルンも響く(40 番)。躍動に満ちた合唱の新年カンタータ(16 番)。

バッハのライプツィヒ時代のカンタータ作品は、ルカ伝冒頭 1、2 章に準拠するものが多く、とくにクリスマス前後の各主日と祝日には、第 2 章本文の第 1 節から第 52 節までの全節が、途切れることなく用いられました。

該当する全曲を表記してみます。

「ルカによる福音書」第 2 章を素材とするカンタータ	
1-14 節(降誕節第 1 祝日) 12/25 [作品の成立順]	イエスの誕生、天使たちの讃歌 BWV 63(再演)、91、110、191、248/I (クリスマス・オラトリオ/第 I 部)
15-20 節(降誕節第 2 祝日) 12/26	羊飼いが飼葉桶の乳飲み子を探しあてる。BWV 40、121、248/II
21 節(新年) 1/1	キリストの割礼と命名 BWV 190、41、16、171、248/IV、143
22-32 節(マリヤの潔めの祝日) 2/2	イエスの初宮詣で、シメオンの頌歌 BWV 83、125、82、157?、200?
33-40 節(降誕節後日曜日)	シメオンの祝福と予告 BWV 152、122、28
41-52 節(顕現節後第 1 日曜日)	神殿での少年イエス BWV 154、124、32

今回演奏の 2 曲は、下線で示した位置にありますが、新約聖書では、わずか 3 ページほどの記事ですので、ぜひ通読してからご来場いただきたいものです。

第 2 章 15-20 節は、クリスマスカードの図柄などでお馴染みの場面を繰り広げますが、カンタータ第 40 番(BWV 40)の歌詞(作者不詳)では趣きが異なります。むしろ、ヨハネの名によるいくつかの文書(「ヨハネ文書」)の世界に強く引きつけられた内容です。1) 合唱は「ヨハネの手紙 I」3:8 の引用。2) レチタティーヴォの冒頭は、すぐ分かる通り「ヨハネによる福音書」冒頭 1:1-14 の書き換え。4) 以下の蛇への言及は「ヨハネの黙示録」12:9 や創世記 3:15 などからの連想、といった具合。

つづく 21 節は、キリストの割礼と命名についてのわずか 3 行ほどの叙述ですが、カンタータ第 16 番は、もっぱら新年の寿ぎの曲となりました。バッハと同年代の台本詩人レームスは、伝統的なラテン語聖歌「テ・

デウム」(われら神なる汝をほめ歌わん)のドイツ語訳を冒頭において、6 楽曲からなる堂々たる神讃歌を構成し、バッハの曲付けが、これに見事に応えます。

ちなみに、22-32 節は有名な“シメオンの頌歌”。次回定演(第 114 回、本年 12 月 3 日)で取りあげるバスの独唱カンタータ《われ足れり》(BWV 82)が、この箇所をテキストの素材にしています。

(4) カンタータ第 192 番《ああ感謝せん 神に》

讃美と祝祭の演目の掉尾は、バッハ円熟期の大掛かりな仕掛けに満ちた佳品。第 3 曲の合唱で 2 本のフルートが典雅に舞い、感謝を歌い納めます。

全ステージ 4 曲、管楽器の饗宴です。お楽しみに。

追悼の心

大村 恵美子(主宰者)

昨 2015 年 12 月中旬に、中村眞一郎『芥川龍之介の世界』(岩波現代文庫)が出版され、それを今年に入ってから新聞広告で知ったので、読んでみました。芥川を読みふけたのはずいぶん昔のことでしたが、何かにつけて、いまでも日常の雑談の中で思い出されることがあります。著者の中村眞一郎氏(1918-97、作家・評論家)には、私も、ふとした縁で参加した或る家の小規模な会合でいちどお会いしたことがあり、好ましい印象で記憶していました。この芥川、中村のお 2 人が今生きておられたら、日本の現状にどんな発言をされるか、聞いてみたかったなという思いで毎ページごと深く読みました。

戸田敏子先生(1922-2015.9.24)

そんな一日、新年のお年賀状に混って、“戸田敏子先生門下生による「戸田敏子先生を囲む会」”から、戸田先生を偲ぶ会のご挨拶、ご報告が届きました(私自身は欠席)。2015 年 3 月発行の『東京バッハ合唱団 半世紀の歩み』の中に、私の「バッハ合唱団をとりまく人々」も組みこまれ、その中には、私の恩師方についても短く紹介されました。戸田敏子先生は、私の直接の師ではなく、合唱団創立の 1962 年以來、定期演奏会のアルト・ソリストとしていちばん多くお世話になった方でした(1963-84 年、37 回!)。187 頁には、「戸田敏子さん、野尻湖合宿 1966 年。改築前の野尻湖ハウスのテラスにて」として、先生のくつろいだお写真もあり、私たちの心に深く刻まれています。



■写真は、上記「囲む会」ご挨拶状より転載。

私の楽理科時代から、個人的なご縁が出来、合唱団創立後は、よく曲がり角ごとに私を後押しされるようなアドヴァイスを、端的な表現でいただいて来たものでした。バザーごとにはすばらしい品々を、大量にお送りいただいたり、こちらからご自宅に車で引き取らせていただきにあがったりして、団員たちにも有名でした。ご寄付も折りあるごとにお送りいただきました。

中山靖子先生 (1921-2015. 1. 16)

昭和の楽壇をよく識る人ならば、中山悌一(声楽バリトン)、中山(旧姓・朝倉)靖子(ピアノ)のおしどりが夫妻のことは知らない人もない位ですが、日本で初めて国際級の演奏家を輩出した頃の、代表格のお2人でした。私の高校(都立富士)の大先輩として、靖子先生は何度かその高校講堂で私たちに演奏してください、私が楽理科に入学すると、副科ピアノの担当教官に、偶然にも靖子先生が決められたのでした。そして在学中は、あれこれ大量の宿題に追われる日々で、ピアノのレッスンには最小時間の準備しか出来ず、いつも先生には顔向けできない思いで入室していったのです。先生が励ますおつもりで、脇のピアノでパッセージを添えてくださると、自分の拙ない音を重ねるよりも、つつい指が止まって、先生の演奏に聴き惚れてしまうのでした。

この、戸田、中山両先生からは、写真でご覧いただけるとおりに、技術的なことよりも、そのご人格、人生への姿勢一般に、深く尊敬を覚え、教育なさった大勢の国際的に通用する優秀なお弟子たちに囲まれて、毎年定期的な昼食会やお花見など(「靖音乐会」)が催されるのでした。戸田先生のお弟子の会には、私は参加することはなかった代りに、毎回の合唱団定期演奏会で、戸田先生にたっぷり学ぶことができました。合唱団のためにも、戸田先生はすばらしい後輩の独唱の方々を、ご紹介いただきました。

靖音乐会だより—追悼特集号—

(2015年3月15日発行)

『靖音乐会だより』は、平成11(1999)年9月に創刊号を発行し、今年は第25号発行を迎える予定でした。靖子先生はいつも真っ先に原稿を送ってくださり、その先生の手書き原稿を、靖音乐会の中で最初に読むことができるのは役得……と密かに思っていました。

追悼号をもって会報の発行を終えることはとても淋しいです。音楽に対する真摯な姿勢を、自らの生き方

をもって示してくださった靖子先生に、心から感謝申し上げます。

(浜中康子)

■在りし日の「靖音乐会」昼食会。
(中央・中山先生、右端・大村)



池内友次郎先生 (1906-1991. 3. 9)

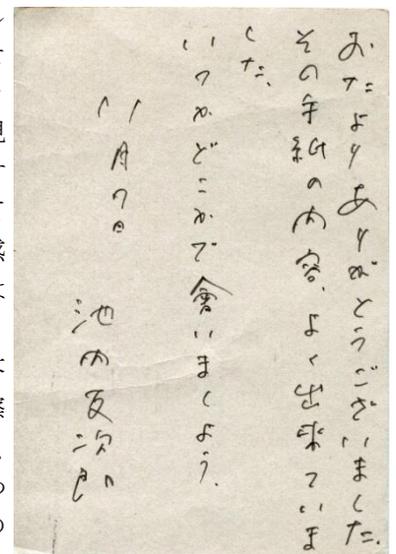
私の専門の直接の恩師は、池内友次郎先生です。写真のお葉書は、他界なさる前年の11月7日付でお書きくださったもの。西洋音楽がわが国に入ってきたのは、主にドイツとフランスの2つのルートからで、諸井三郎方のドイツルートに対して、フランスルートは、池内先生が中心で、作曲科の教室の空気も、両者がまるで違っていたように覚えています(註*)。俳人・高濱虚子のご子息だった池内先生は、直覚的に鋭く、またなにか楽天的に明かるい人生志向に感じられました。高校時代に、音楽の担当の先生に紹介されて、西荻窪の池内先生邸に通うようになったのですが、先生は弟子たちに対しても、その噂をまわりに話される時にも、おかしそうに、楽しそうに、人物評価をされるのです。ほめる場合にも、まじめに言われたあと、いたずらっぽいエピソードを加えられたり、とにかく深刻な怒り声を耳にしたことがありませんでした。

[註*) 池内先生と同世代の平尾貴四男氏(1907-1953)もフランスルートの代表的な作曲家のお一人です。私とはこれまで接点がなかったのですが、偶然にも、次回の定演でBWV 16を振ってくださるオーボエの辻功氏の御祖父にあたられる方で、先日の荻窪教会での練習の折、なんとご両親のお仲人をなさったのが池内先生だったとご本人から伺いました。辻功氏との距離が一瞬のうちに縮まるのを覚えました。]

こういうわけで、前途の見通しのきかない青春とは、当事者にとっては辛いものですが、私にとっては、これらお3人に代表される師匠の方々は、いずれも人生を楽しんでおられ、後輩には前進を、むしろ本人に委ねておられるように見えました。このような手引きをされれば、小さい者も、非行に走ったり、怠け、引きこもりに退いたりする余地が感じられないようになるのではないのでしょうか。

昨年は、はからずも中山靖子、戸田敏子両師匠をお送りする年になってしまいました。ずいぶん前にお別れした池内先生の、今まで手もとに残してあるお葉書(写真)からもお察しいただけるように、その字体といい、飄々としたユーモラスな表現といい、私は今も、すばらしい先生方に育てられたものと、日々感謝を新たにしないではいられないのです。

そして、夭折した芥川龍之介の心証を推察しながら、とても残念、気の毒な感慨にとらわれずにはいられないの



です。いま、教育改善とかさわがれていますが、私にはそれが却って全部改悪の元凶としか考えられず、教育は、成熟した成人を面前に立たせることでしかない、と強調したく、この文を書きました。

////////////////////////////////////

ワルブレヒトご夫妻、来日

1980年代に東ドイツから日本に移住して2001年にご帰国なさるまで、3人のお子様方ともども私どもと親しいお付き合いを重ねてくださったゲルハルト・ワルブレヒト、幸子ご夫妻が短期間来日されて、そのご多忙な日々の一、かつてのお住い、成城学園の近くで旧交を温めることができました。

新日本フィルのヴィオラ奏者として活躍なさっていたワルブレヒト氏は、都合のつくかぎり、東京バッハ合唱団の定期公演にもご協演くださり、本場のバッハ解釈をもって合唱団の演奏に深みを添えてくださったものです（ご長女ナナさんはヴァイオリンで協演）。

われわれの初のドイツ巡演（1983年）の際、ライブツィヒ・トーマス教会での演奏を聴いてくださったことが、移住して来られてすぐに、私どもを訪ねて下さったきっかけだったようで、30年以上の月日が流れました。1988年の第2回ドイツ巡演では、小学生だった次女のすみれさんもソプラノ団員として同行し、バッハの出身の地であるとともに、ワルブレヒト一族の故地でもあるアイゼナハ（ここで代々牧師をつとめる家系であったとのこと）のバッハの銅像の前での、お祖父さまとの“涙の対面”のシーンは、すでに何度も語られましたし、今後も長く思い出されることでしょう。

そのすみれさんもすでにライブツィヒ大学を卒業して、それこそキレイキレイのクリエイティブなお仕事をなさっていらっしゃるそうです。幸子夫人が、帰国後の定住地ドレスデンの、復興なったフラウエン（聖母）教会合唱団に加わって歌っていらっしゃることは、先の月報（2015年7月）でもお伝えしました。

ワルさん（当合唱団でも、新日フィルでもゲルハルト氏の愛称）は、ヴィオラ奏者としてのお仕事のほかに、近郊の小さな町の教会の歴史的オルガン（写真）を定期的に弾きはじめたのだそうです。その日の再会のテーブルでは、そのオルガン、1730年/31年のジルバーマン、まったくロマンティックなところのない澄み



■ワルブレヒトご夫妻（左）と、2月9日、成城・旭館にて。

2016年の活動予定

- ◆4月29日（祭日）、エキュメニカル功労賞受賞公演
会場＝岐部ホール（四谷・聖イグナチオ教会）
式典と上演（BWV 192）、午後1時より
- ◆5月28日（土）、第113回定期演奏会
会場＝府中の森芸術劇場、午後2時開演
BWV 148、BWV 40、BWV 16、BWV 192
佐々木まり子(A)、鏡貴之(T)、山本悠尋(B)
BWV 16の指揮は、辻功氏（オーボエとも）
- ◆7月2日（土）、特別演奏会（創立54周年記念）
会場＝荻窪教会
BWV 81、BWV 148、BWV 508、BWV 140
公演後、創立記念懇親会（同会場）
- ◆8月4日（木）－7日（日）、長野県野尻湖合宿
・8月5日（金）、ワークショップ
会場＝野尻湖公民館、午後6時30分より
（長野県信濃町のみなさんとのコラボ）
（素材：BWV 147/10）
・8月6日（土）、コンサート（第41回野尻湖演奏会）
会場＝野尻湖国際村・集会場（神山教会）
BWV 81、BWV 148、BWV 515、BWV 140
- ◆12月3日（土）、第114回定期演奏会
会場＝府中の森芸術劇場、午後2時開演
BWV 14、BWV 508-518、BWV 82、BWV 140
光野孝子(S)、鏡貴之(T)、山本悠尋(B)
- ◆12月17日（土）、クリスマス・コンサート
会場＝荻窪教会（公演後、懇親会）
BWV 28、BWV 452、BWV 82、BWV 1
- ◆以降、年内冬休み。
新年練習開始、荻窪教会：1月7日（土）
目白聖公会：1月16日（月）<1/9は祭日で休み>

きった響きで、ストップはこうこうで、と、目を輝かせて語りつる姿はまったく昔のままでした。団員・団友・オーケストラの皆さまに、くれぐれも宜しく、との伝言をお預かりしました。(K)

■写真下：Reinhardtsgrimma mit Gottfried Silbermann-Orgel erbaut 1730/31, Kirchspiel Glashütte（ご本人のメモによる）。写真はWeb上で探したもの。

